

第1章

幼児の生活





第1節 幼児の生活リズム

起床就寝時刻は27年間で早寝早起き傾向がさらに強まっている。また、幼稚園児、保育園児ともに家の外にいる平均時間は増加する一方であり、園児が家の外で過ごす平均時間は27年間一貫して伸び続けている。

●平日の起床時刻は早まっている

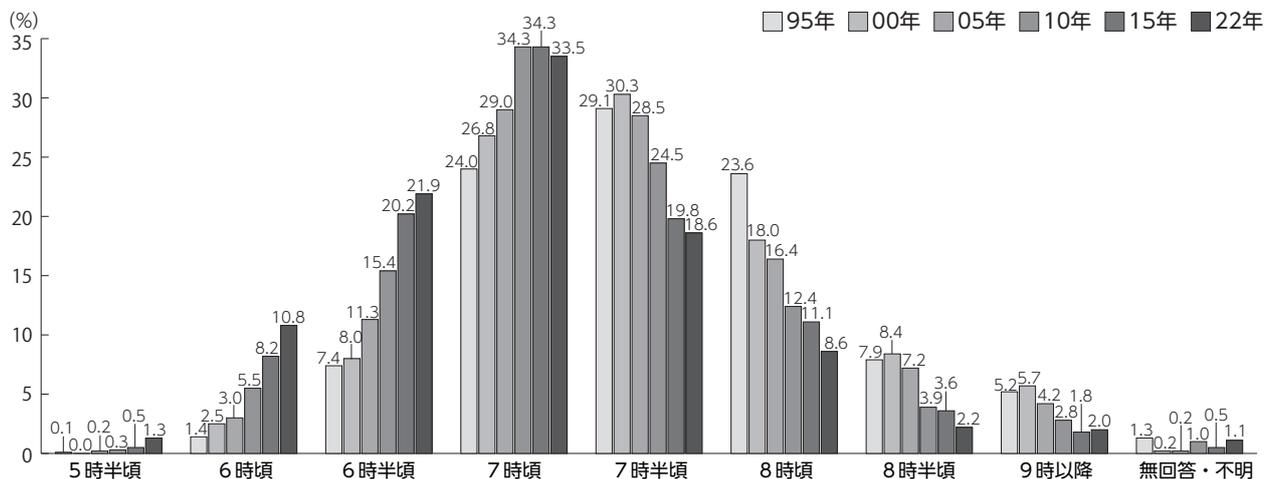
はじめに、平日の起床時刻をみていきたい(図表1-1-1)。22年では、幼児の3割強が7時より早い時刻に起床している。7年前と比べると「6時半頃」以前の時間帯が増加した。27年間の変化をみてみると「6時半頃」以前より早い時刻に起きている比率は、95年8.9%、00年10.6%、05年14.5%、10年21.2%、15年28.9%、22年34.0%と増加しており、この27年間で幼児はますます早起きになっており、2010年を境にその傾向が強まっていることがわかる。起床時刻を低年齢(1歳6か月~3歳11か月)・高年齢(4歳~6歳11か月)の年齢区分ごとに、就園状況別でみてみよう(図表1-1-

2)。低年齢では幼稚園児はごくわずかであるため、未就園児と保育園児で比較を、高年齢では未就園児はごくわずかであるため、幼稚園児と保育園児で比較を行う。低年齢では「6時半頃」より前に起床すると回答した保育園児が44.7%、未就園児が24.1%と保育園児のほうが起床時刻が早かった。高年齢では、保育園児が39.1%に対し、幼稚園児は32.9%とやはり保育園児のほうが早い傾向にある。

●27年間で早寝傾向がみられる

次に就寝時刻をみていく(図表1-1-3)。22年では「21時頃」から「21時半頃」に就寝する幼児が約半

図表1-1-1 平日の起床時刻(経年比較)



図表1-1-2 平日、「6時半頃」以前に起床する比率(年齢区分別・就園状況別 22年)

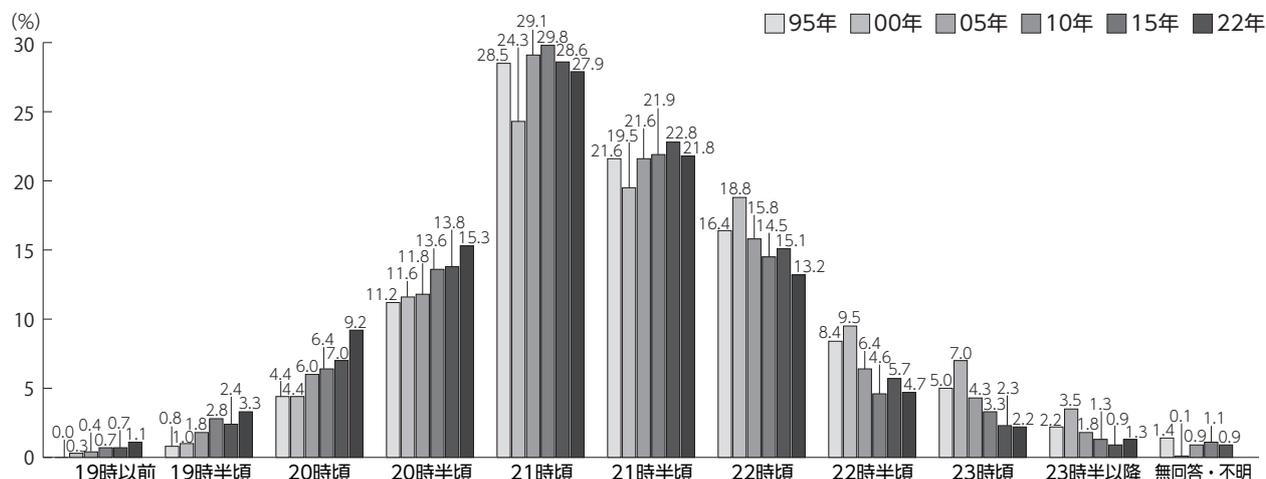
低年齢		高年齢	
未就園児 (807)	保育園児 (565)	幼稚園児 (1,034)	保育園児 (602)
24.1	44.7	32.9	39.1

注1) ()内は人数。
 注2) 「5時半頃」「6時頃」「6時半頃」の合計。
 注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。
 保育園児(低年齢)：1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。
 幼稚園児(高年齢)：4歳0か月~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。
 保育園児(高年齢)：4歳0か月~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

数を占めており、1歳6か月～6歳の幼児の大半はこの時間帯に寝ているといえる。21時台がピークとなる全体傾向は27年間で変わらない。比較的遅いと考えられる「22時頃」以降に寝る幼児の比率を合計してみると、95年32.0%、00年38.8%、05年28.3%、10年

23.7%、15年24.0%、22年21.4%と27年前からは10.6ポイント、17年前からは6.9ポイント減少しており、この27年間で幼児はますます早寝になってきたことがわかる。22年調査で年齢区分ごとに、就園状況別にみると(図表1-1-4)、低年齢では22時頃以降に

図表1-1-3 平日の就寝時刻(経年比較)

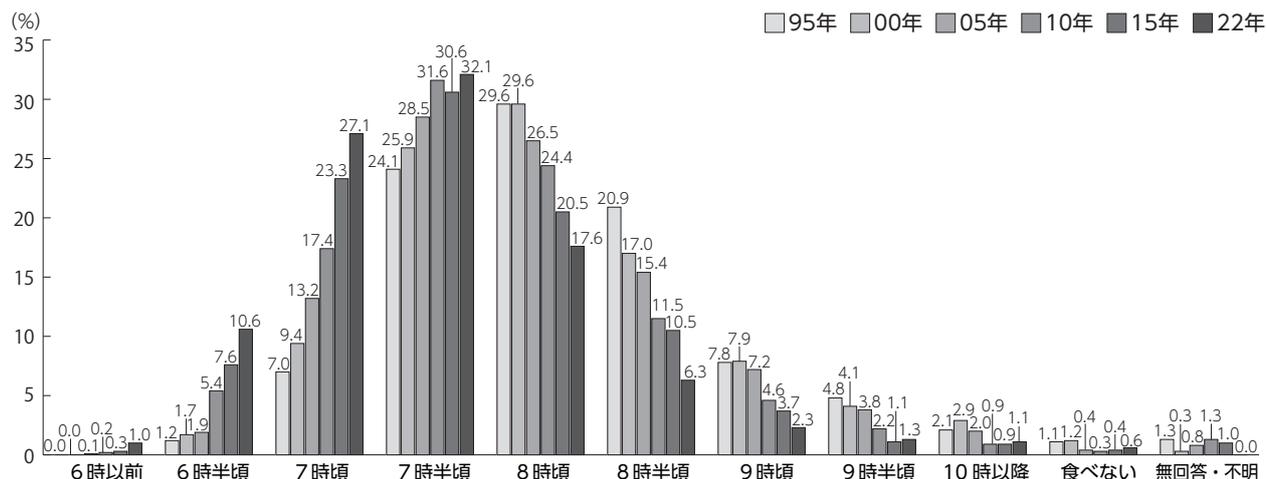


図表1-1-4 平日、「22時頃」以降に就寝する比率(年齢区分別・就園状況別 22年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (807)	保育園児 (565)	幼稚園児 (1,034)	保育園児 (602)
21.2	29.1	12.2	33.5

注1) ()内は人数。
注2) 「22時頃」「22時半頃」「23時頃」「23時半以降」の合計。

図表1-1-5 平日の朝食時刻(経年比較)



図表1-1-6 平日、「7時半頃」以前に朝食をとる比率(年齢区分別・就園状況別 22年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (807)	保育園児 (565)	幼稚園児 (1,034)	保育園児 (602)
44.4	86.0	75.4	81.7

注1) ()内は人数。
注2) 「6時以前」「6時半頃」「7時頃」「7時半頃」の合計。

就寝すると回答した保育園児が29.1%、未就園児が21.2%と保育園児のほうが就寝時刻が遅く、高年齢では保育園児が33.5%に対し、幼稚園児は12.2%と、低年齢と同じく保育園児のほうが遅い傾向であった。保育園児は、未就園児・幼稚園児に比べて起床時刻は早く、就寝時刻は遅い傾向がみられた。

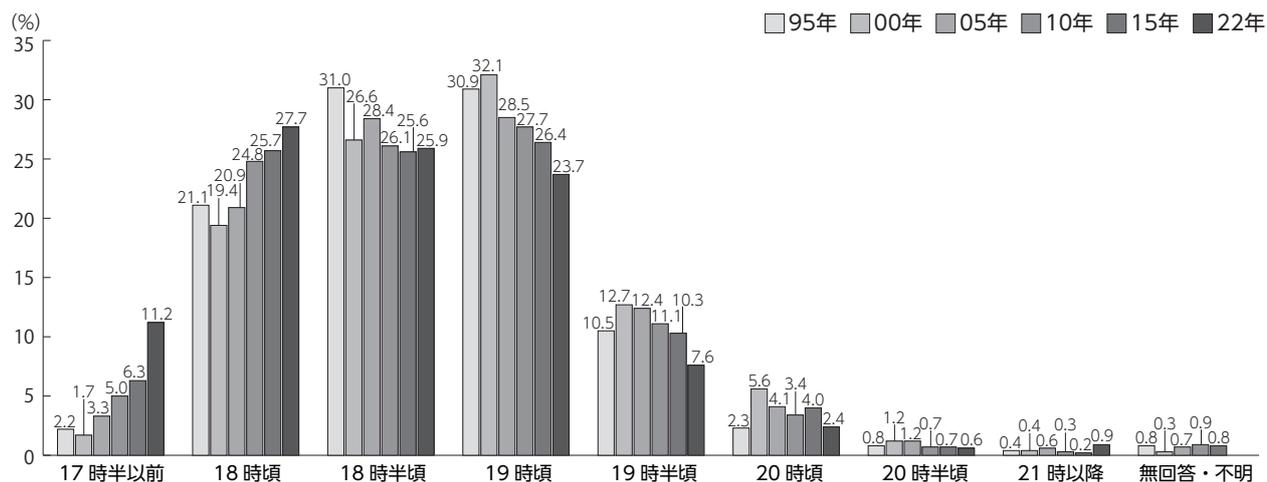
●食事をする時刻の傾向

朝食の時刻を27年間で比べたものが図表1-1-5である。起床時間と同様に年々早くなっており、「7時頃」以前に朝食を食べる比率は、95年8.2%、00年11.1%、05年15.2%、10年23.0%、15年31.2%、22年38.7%と増加している。22年の「7時半頃」以前に朝食をとる比率を年齢区分別・就園状況別でみると（図表1-1-6）、低年齢では保育園児が86.0%、未就園児

44.4%、高年齢でも保育園児81.7%、幼稚園児75.4%が「7時半頃」までに朝食をとることがわかった。起床時刻と同様に保育園児が早いことがわかる。

次に、夕食の時刻を27年間で比べたのが図表1-1-7である。夕食の時刻は27年間変わらず「18時頃」から「19時頃」に集中している。一方22年では「17時半以前」が11.2%と27年前から9.0ポイント増加しており、早寝傾向により夕食の時刻も早まっていることがわかる。22年調査で「19時半頃」以降に夕食をとる比率を子どもの年齢区分・就園状況別にみてみよう（図表1-1-8）。低年齢では保育園児が12.8%、未就園児9.5%、高年齢でも保育園児19.1%、幼稚園児8.1%が「19時半頃」以降に夕食をとることがわかった。保育園児のほうが未就園児や幼稚園児に比べて、朝食が早く、夕食は遅い傾向にあるといえるだろう。

図表1-1-7 平日の夕食時刻（経年比較）



図表1-1-8 平日、「19時半頃」以降に夕食をとる比率（年齢区分別・就園状況別 22年）

(%)

低年齢		高年齢	
未就園児 (807)	保育園児 (565)	幼稚園児 (1,034)	保育園児 (602)
9.5	12.8	8.1	19.1

注1) ()内は人数。

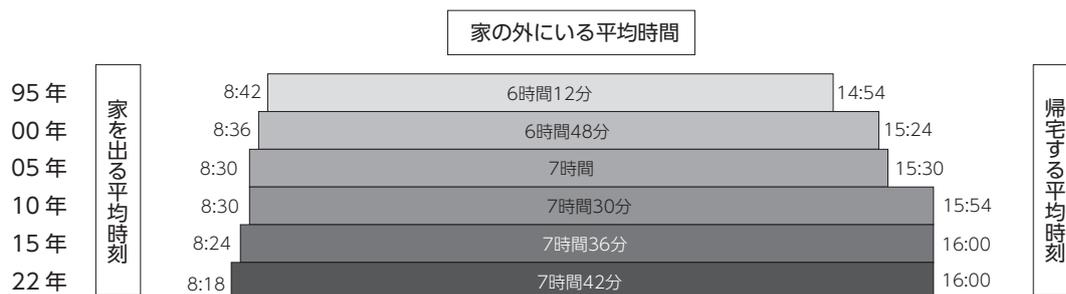
注2) 「19時半頃」「20時頃」「20時半頃」「21時以降」の合計。

●家の外にいる時間が長くなっている

家を出る平均時刻・帰宅する平均時刻と家の外にいる平均時間を27年間で比べたものが図表1-1-9である。園に向けて家を出る平均時刻は27年前より24分早くなった。また、帰宅する平均時刻は1時間6分遅くなった。その結果、家の外にいる平均時間は、7時間42分となり、27年前より1時間30分増加した。27年で家に帰る時刻が遅くなっている傾向は、就労する母親の増加

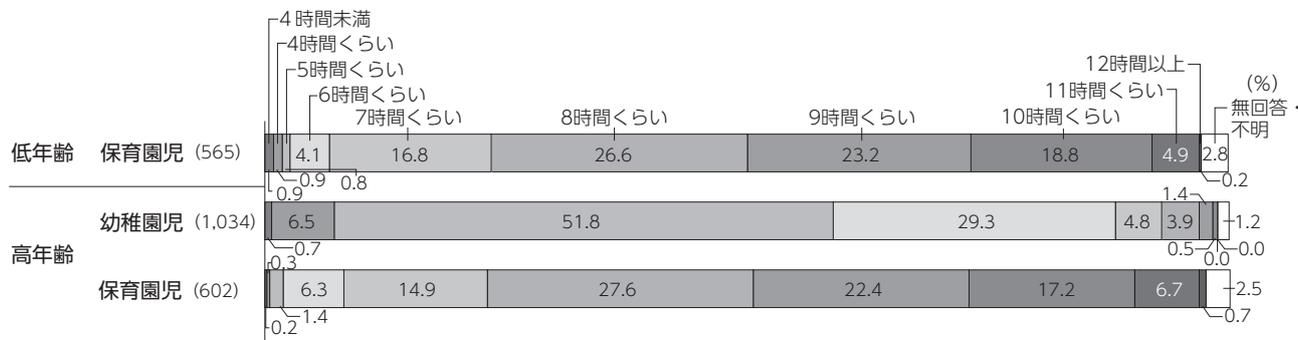
を背景に、延長保育や幼稚園での預かり保育が増加していることも一因だろう。また、22年の園で過ごす平均時間をみると(図表1-1-10)、年齢にかかわらず保育園児では「8時間くらい」から「10時間くらい」が約7割を占めている。高年齢の幼稚園児では「5時間くらい」(51.8%)と「6時間くらい」(29.3%)が約8割を占めている。保育園児の2割超は10時間以上、園で過ごしているようである。

図表1-1-9 家の外にいる平均時間(経年比較)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 家を出る時刻、家に帰る時刻のいずれかの質問に対して無回答・不明のあった人は、分析から除外している。
 注3) 95年調査は、「18時以降」を18時30分、00年調査以降は、「18時頃」を18時、「18時半頃」を18時30分、「19時以降」を19時と置き換えて算出した。
 注4) 家の外にいる平均時間は、家を出る平均時刻と帰宅する平均時刻から算出した。

図表1-1-10 園で過ごす平均時間(年齢区分別・就園状況別 22年)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。
 保育園児(低年齢)：1歳6か月～3歳11か月の保育園に通っている幼児。
 幼稚園児(高年齢)：4歳0か月～6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。
 保育園児(高年齢)：4歳0か月～6歳11か月の保育園に通っている幼児。
 注3) ()内は人数。



第2節 習い事

習い事をしている比率は7年前から減少しており、年齢別にみても同様の傾向にある。低年齢の未就園児では通信教育と体を動かすもの、幼稚園児ではスイミングと体操が多い。保育園児では低年齢、高年齢ともにスイミング、通信教育が上位を占めた。

●習い事をしている比率は7年前から減少

1歳6か月～6歳11か月の幼児が習い事をしている比率は、05年が57.7%、10年が47.7%、15年が48.4%、22年が40.7%だった。05年から10年にかけて10ポイント減少し、10年から15年はほぼ横ばいだったが、22年はそこから7.7ポイント減少した。

図表1-2-1で子どもの年齢別にみると、年齢が上がるにつれて習い事をしている比率が増加する傾向は、この27年間で変わらなかった。22年に注目すると、習い事をしている比率は3歳児で24.2%、4歳児では45.2%と21ポイントの差がみられた。経年で比較すると、どの年齢でも習い事をしている比率はこの27年間のうち最も低くなっている。15年から22年にかけて習い事をしている比率は、5歳児で12.1ポイント減少し、6歳児では15.4ポイント減少した。

●習い事をしている比率は保育園児は横ばいだが、未就園児と幼稚園児で減少傾向

子どもの就園状況で習い事をしている比率に差はあるだろうか。図表1-2-2で低年齢（1歳6か月～3歳11か月）をみてみよう。22年で未就園児が習い事をしている比率は15.5%、保育園児は17.3%とほぼ同程度だった。高年齢（4歳0か月～6歳11か月）になると、22年で幼稚園児が習い事をしている比率は61.1%、保育園児は53.6%と7.5ポイントの差がみられた。幼稚園児のほうが習い事をしている比率が高かった。

15年と22年で変化はあっただろうか。低年齢の未就園児で習い事をしている比率は15年で28.3%、22年は15.5%と12.8ポイント減少した。高年齢の幼稚園児では15年が73.1%、22年が61.1%と12ポイント減少した。一方、低年齢、高年齢ともに保育園児において比率に大

図表1-2-1 習い事をしているか（子どもの年齢別 経年比較）

	95年	00年	05年	10年	15年	22年
全体	53.7	49.8	57.7	47.7	48.4	40.7
1歳後半児	20.1	23.8	25.3	17.0	16.8	9.0
2歳児	29.0	27.2	37.4	25.1	25.9	17.1
3歳児	41.8	42.5	51.9	38.2	29.5	24.2
4歳児	55.4	47.4	54.8	46.0	48.3	45.2
5歳児	76.7	68.5	74.8	68.1	71.4	59.3
6歳児	81.5	76.6	86.5	77.4	82.9	67.5

注1) 習い事を「している」の%。

注2) 1歳後半児は、1歳6か月～1歳11か月の幼児。

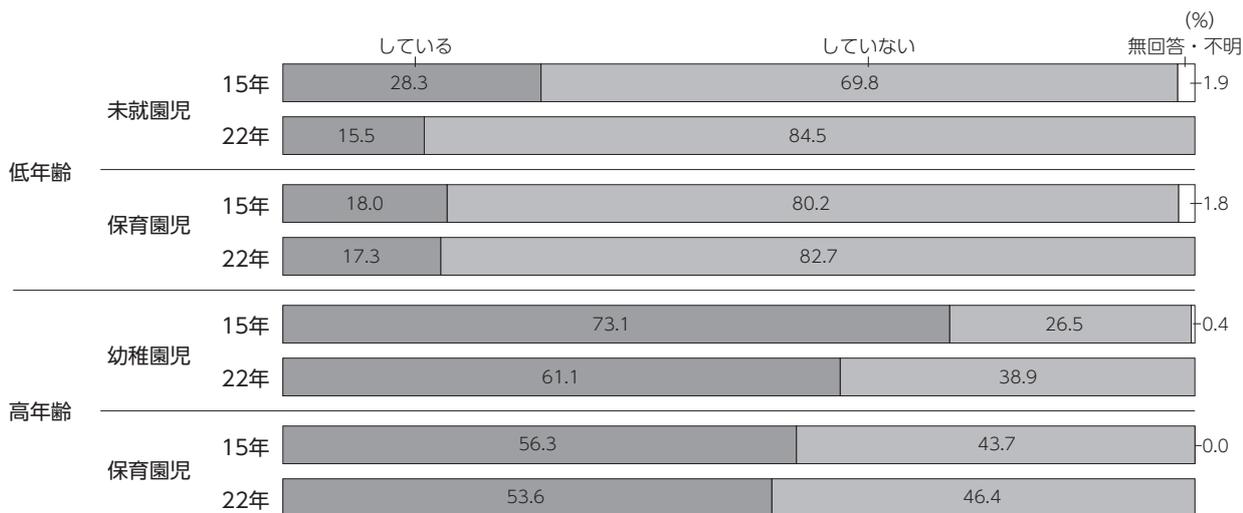
きな差はみられなかった。就園状況別の特徴として、未就園児と幼稚園児のほうが保育園児より習い事をする比率は高いが、この7年で未就園児、幼稚園児ともに減少傾向にあるといえよう。

●約40%が習い事でデジタルメディアの活用を進めてほしいと回答

子どもの習い事でデジタルメディアの活用を進めてほしいかたずねた。図表1-2-3で幼児の全体をみると、38.2%が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答しており、「どちらともいえない」とほぼ同じ比率となっている。

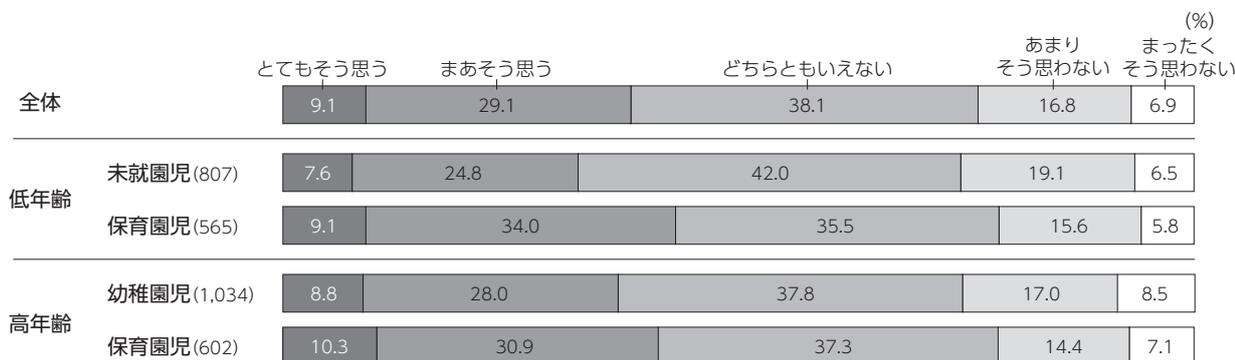
就園状況別にみると、低年齢での未就園児の「とてもそう思う」「まあそう思う」の比率は32.4%、保育園児は43.1%と10.7ポイントの差がみられた。

図表1-2-2 習い事をしているか（年齢区分別・就園状況別 15年・22年比較）



注1) 習い事を「している」の%。
 注2) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注3) 22年の「していない」は、「していないが、今後はさせたい」「していないし、今後も予定はない」を足した%。
 注4) 人数は以下のとおり。
 低年齢：未就園児15年920人、22年807人。保育園児15年452人、22年565人。
 高年齢：幼稚園児15年1,253人、22年1,034人。保育園児15年489人、22年602人。

図表1-2-3 習い事でデジタルメディアの活用を進めてほしいか（全体・年齢区分別・就園状況別 22年）



注1) 習い事をしていない人も含んでいる。
 注2) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注3) ()内は人数。

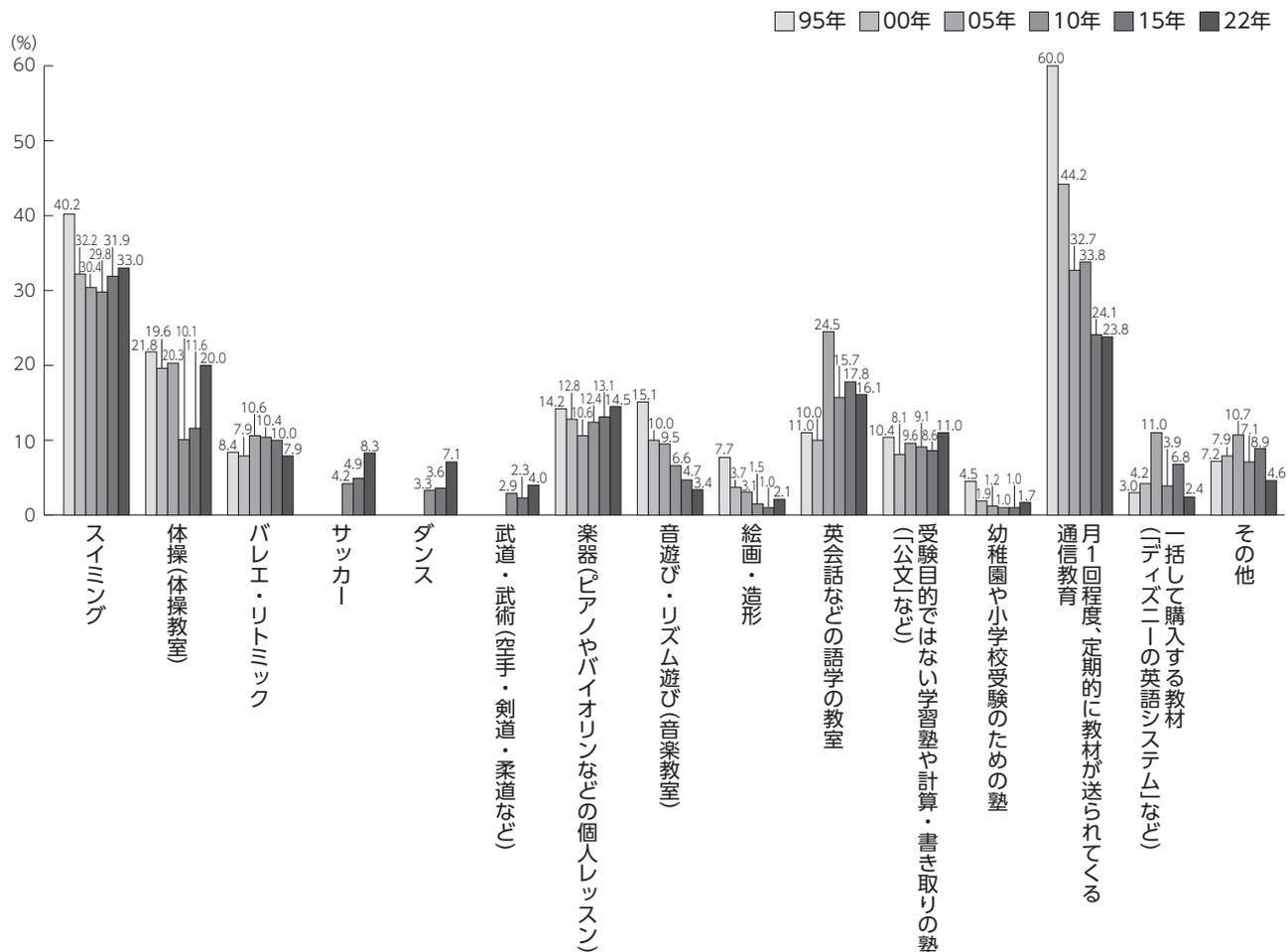
●習い事は、スイミング、通信教育、体操、英会話などの語学の教室が多い

幼児の習い事の種類には、どのような傾向があるか。

図表1-2-4で22年調査の幼稚園・保育園以外で習っている習い事の種類をみると、多い順に「スイミング」

33.0%、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」23.8%、「体操（体操教室）」20.0%、「英会話などの語学の教室」16.1%だった。22年では、過去と比べて順位の入れ替わりはあるが、この4項目の比率が高かった。

図表1-2-4 幼稚園・保育園以外の習い事の種類（経年比較）



注1) 複数回答。
 注2) 「現在、習い事をしている」と回答した保護者のみを対象としている。
 注3) 10年調査で項目名を変更した。05年調査までは「スイミングスクール」→10年調査以降は「スイミング」、同様に「スポーツクラブ・体操教室」→「体操（体操教室）」、「バレエ・リトミック」→「バレエ」「リトミック」（集計は経年比較するために合算）。「幼児向けの音楽教室」→「音遊び・リズム遊び（音楽教室）」、「絵画の教室」→「絵画・造形」。
 注4) 「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」は、22年はこどもちゃれんじとそれ以外の通信教育を足した%。
 注5) 「タブレット教材」「プログラミング・ロボット製作」「無回答・不明」は図示を省略。

●低年齢は、通信教育とスイミングが人気。高年齢になると習い事をする比率は増加し、幼稚園児、保育園児ともにスイミングがトップに

22年調査の習い事の種類を子どもの就園状況別にみた。図表1-2-5をみると、低年齢（1歳6か月～3歳11か月）の場合、未就園児では「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」と体を動かすもの（「スイミング」、「リトミック」、「体操」）の比率が高かった。保育園児では「スイミング」「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」の比率が高く、次いで「英会話などの語学の教室」「楽器」の習い事をしていた。高年齢（4歳0か月～6歳11か月）の場合、幼稚園児、保育園児ともに「スイミング」の比率がもっとも高かった。次いで、幼稚園児では「体操」、「月1回程度、定期

的に教材が送られてくる通信教育」、「英会話などの語学の教室」、「楽器」の順に並んだ。一方、保育園児では低年齢の場合と同様に「スイミング」「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」が高い比率で続き、「楽器」、「体操」「英会話などの語学の教室」の順に並んだ。

低年齢では、「通信教育」と「スイミング」が人気で、習っている人の約3割を占めている。高年齢になると幼稚園児で習い事をする比率が増加し、「スイミング」や「体操」といった体を動かすものに加えて、「英会話」や「通信教育」、「楽器」も高い比率で習っていた。保育園児でも幼稚園児ほどではないが習い事をする比率が増え、低年齢で選ばれていた「通信教育」や「英会話教室」に加えて、「スイミング」や「楽器」も習っていた。

図表1-2-5 習い事の種類（年齢区分・就園状況別 22年）

(%)

未就園児 (807)		保育園児 (565)		
低年齢	1. 通信教育	32.9	1. スイミング	29.1
	2. スイミング	29.1	2. 通信教育	25.7
	3. リトミック	18.2	3. 英会話	15.7
	4. 体操	17.9	4. 楽器	9.5
	5. 受験目的ではない塾(公文等)	12.9	5. リトミック	7.1
	習い事をしていない	84.5	習い事をしていない	82.7
幼稚園児 (1,034)		保育園児 (602)		
高年齢	1. スイミング	35.7	1. スイミング	34.0
	2. 体操	24.0	2. 通信教育	23.3
	3. 通信教育	20.6	3. 楽器	18.7
	4. 英会話	16.6	4. 体操	16.8
	5. 楽器	15.2	5. 英会話	16.4
	習い事をしていない	38.9	習い事をしていない	46.4

注1) 複数回答。

注2) 10年調査で項目名を変更した。05年調査までは「スイミングスクール」→10年調査以降は「スイミング」、同様に「スポーツクラブ・体操教室」→「体操（体操教室）」、「バレエ・リトミック」→「バレエ」「リトミック」（集計は経年比較するために合算）。「幼児向けの音楽教室」→「音遊び・リズム遊び（音楽教室）」、「絵画の教室」→「絵画・造形」。

注3) 「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」は、22年はこどもちゃれんじとそれ以外の通信教育を足した%。

注4) 「タブレット教材」「プログラミング・ロボット製作」[無回答・不明]は図示を省略。

注5) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。

高年齢：4歳～6歳11か月の幼児。

注6) () 内は人数。



第3節 家にあるもの

家にあるものをみると、「絵本」「テレビ」などが使われ続けている。「ワーク」「タブレット端末」を使う頻度がやや増える一方で、「ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー」は大きく減少している。母親と使う頻度では「パソコン」「テレビゲーム」が増加している。新しいメディアである「スマートフォン」は22年調査で母親と一緒に使う比率は半数以上に達した。

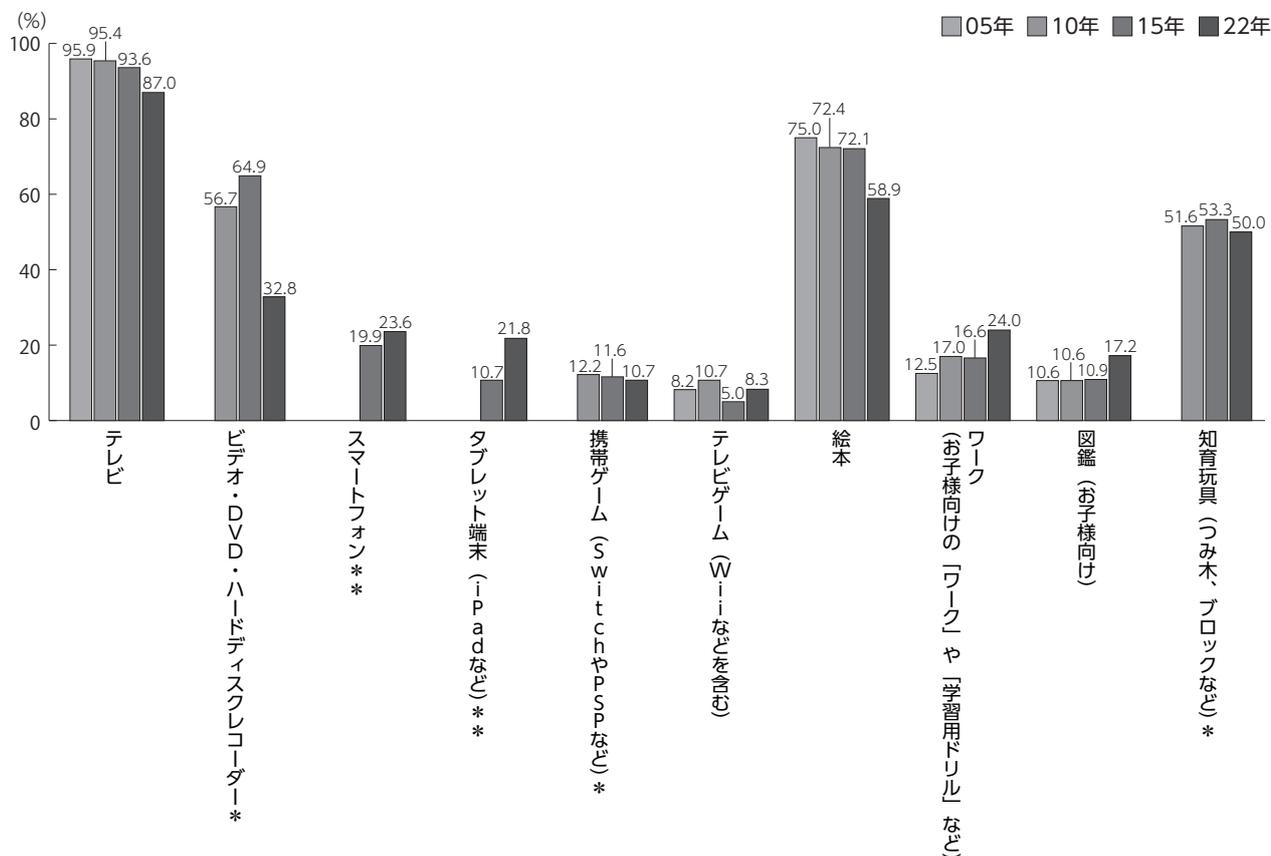
●テレビや絵本の利用頻度は高いものの、過去に比べて減少傾向に

この節では、幼児の家にあるものと、使う頻度、一緒に使う人についての変化をみてみたい。経年での使用頻度の変化を見ると（図表1-3-1）、もっとも頻度が高いものは「テレビ」、次いで「絵本」であり、どちらも使用頻度は減少傾向にある。「テレビ」は15年に93.6%であったが22年に87.0%となり7年間で6.6ポイント減少した。また「絵本」は15年に72.1%であっ

たが22年に58.9%となり13.2ポイント減少した。微増したのは「ワーク」「タブレット端末」「図鑑」である。「ワーク」は15年16.6%、22年24.0%で7.4ポイント増加した。「図鑑」は15年10.9%、22年17.2%で6.3ポイント増加した。一方で、「ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー」は10年56.7%、15年64.9%、22年32.8%となり、15年から22年にかけて32.1ポイント減少した。

22年のみの使用頻度をみたものが図表1-3-2である。頻度の高い順に、「テレビ」87.0%、「絵本」

図表1-3-1 家にあるものを使う頻度（経年比較）



注1) 「ほとんど毎日」「週に3~4日」の合計。

注2) 「*」は10年、15年、22年のみの項目、「**」は15年、22年のみの項目。

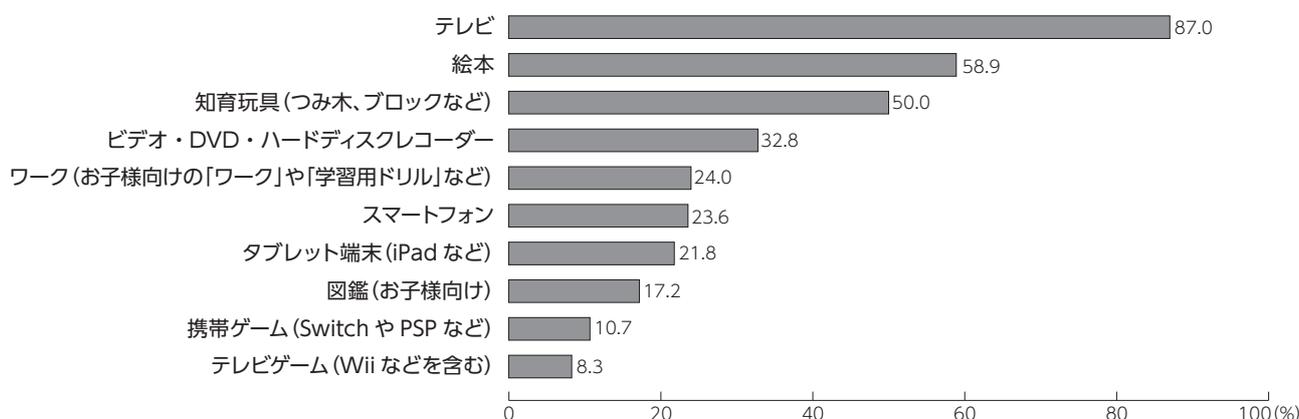
58.9%、「知育玩具」50.0%、「ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー」32.8%である。その他のものはいずれも使用頻度が3割以下であるが、「スマートフォン」は23.6%と「携帯ゲーム」10.7%よりも高くなっている。

この17年間または7年間で使用頻度が増加した「ワーク」「タブレット端末」の使用頻度をみたものが図表1-3-3、4である。「ワーク」の使用頻度は、05年調査から徐々に増加しており、「ほとんど毎日」「週に3~4日」「週に1~2日」使う比率を合わせると05年26.6%、10年34.7%、15年34.3%、22年41.4%となり、17年間で14.8ポイント増加した。また「タブレット端末」

は「家がない」比率が15年は50.1%、22年は33.3%と16.8ポイント減少している。「ほとんど毎日」「週に3~4日」「週に1~2日」使う比率を合わせると、15年は15.6%、22年は29.7%と14.1ポイント増加している。

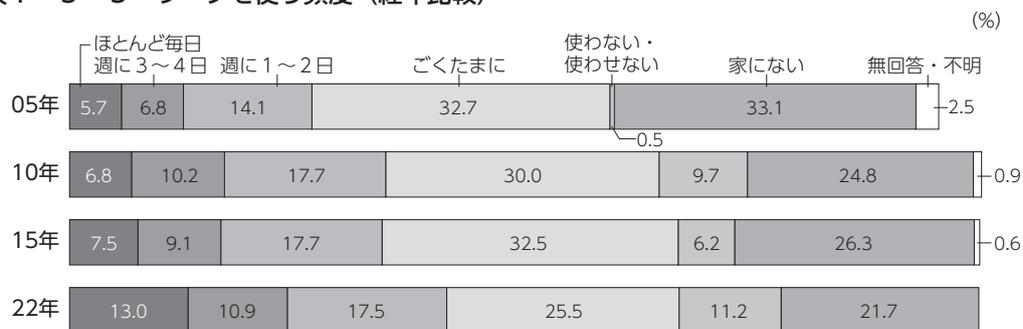
図表1-3-5は、子どもの年齢区分別・就園状況別に「テレビゲーム」と「携帯ゲーム」の使用頻度をみたものである。「テレビゲーム」と「携帯ゲーム」の使用はともに高年齢児が高くなっている。とくに高年齢の幼稚園児では、18.9%が「ほとんど毎日」「週に3~4日」の頻度で携帯ゲームを使っている。

図表1-3-2 家にあるものを使う頻度 (22年)



注1) 「ほとんど毎日」「週に3~4日」の合計。

図表1-3-3 ワークを使う頻度 (経年比較)



注1) 05年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない・見せない」を合計した数値となっている。10年調査では「ぜんぜん使わない・使わせない」になっている。

図表1-3-4 タブレット端末の使用頻度 (経年比較)



注1) 05年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない・見せない」を合計した数値となっている。10年調査では「ぜんぜん使わない・使わせない」になっている。

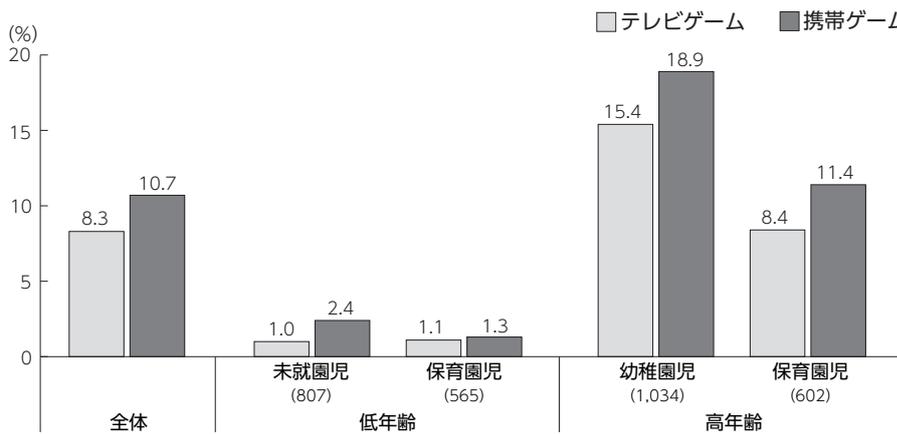
●母親と一緒に使う頻度が高いのは「ワーク」

母親と一緒に使う頻度をみたものが図表1-3-6である。「ワーク」は12年間で一貫してもっとも高く、7割以上である。母親と一緒に使う比率が12年間で増加したものが「パソコン」と「携帯ゲーム」である。「パソコン」は、10年40.9%、15年43.2%、22年50.1%で、12年間で9.2ポイント増加した。「携帯ゲーム」も同様に増加の傾向で、12年間で9.5ポイント増加している。

「テレビやビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー(HDR)、スマートフォン」は4割～5割強程度であった。

22年のみの就園状況別にみると、低年齢において「スマートフォン」は未就園児が68.1%、保育園児が57.4%で10.7ポイントの差がある。唯一「テレビゲーム」を使う頻度は未就園児より保育園児の比率が高い項目となっている。高年齢において幼稚園児と保育園児の差はほぼなくなるが、「パソコン」は幼稚園児が44.6%、保育園児が55.2%となり10.6ポイントの差がある。

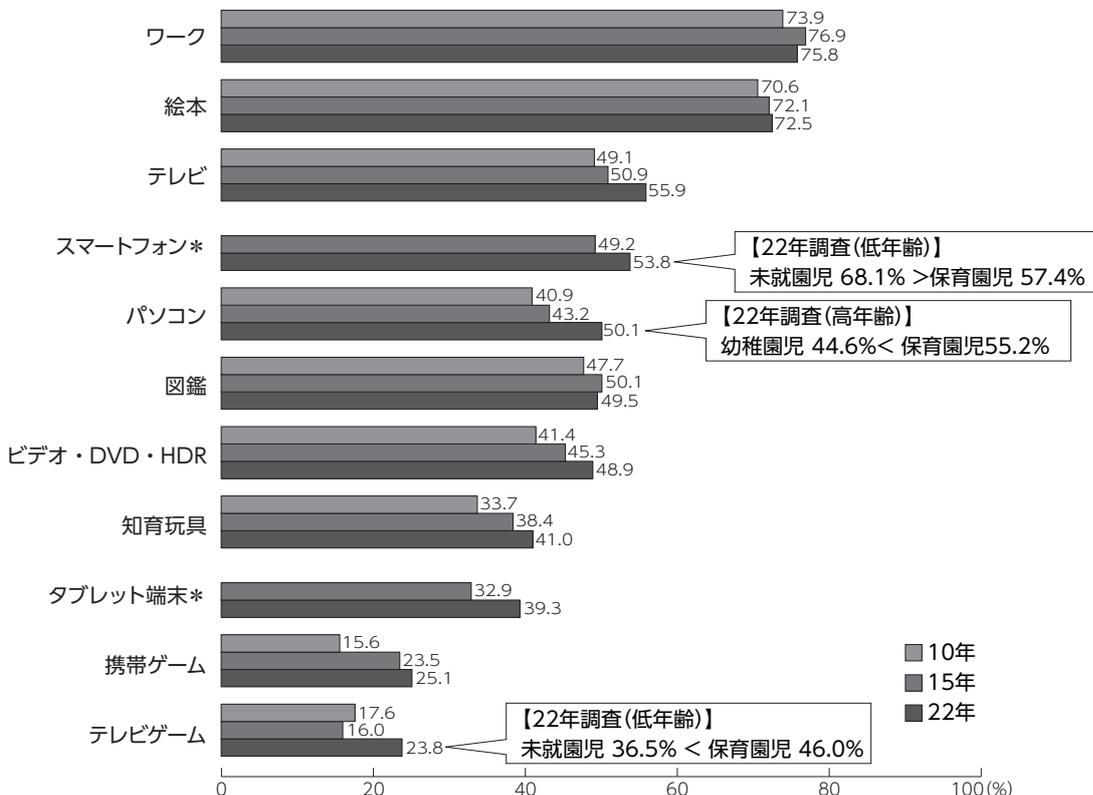
図表1-3-5 テレビゲームと携帯ゲームの使用頻度 (年齢区分別・就園状況別 22年)



注1) 「ほとんど毎日」「週に3～4日」の合計。

注2) () 内は人数。

図表1-3-6 母親と一緒に使う頻度 (経年比較)



注1) 家にある人のみを分析。

注2) 「*」は15年、22年のみの項目。

注3) 項目は22年調査結果の降順に図示。



第4節 メディアとのかかわり

テレビを1日2時間以上みている乳幼児は約5割、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーは約2割である。タブレット端末をもつ家庭のうち低年齢児で2割以上、高年齢児で3割以上が1日1時間以上使用している。低年齢と高年齢ともに、9割以上が「タブレット端末をタップする操作」ができる。

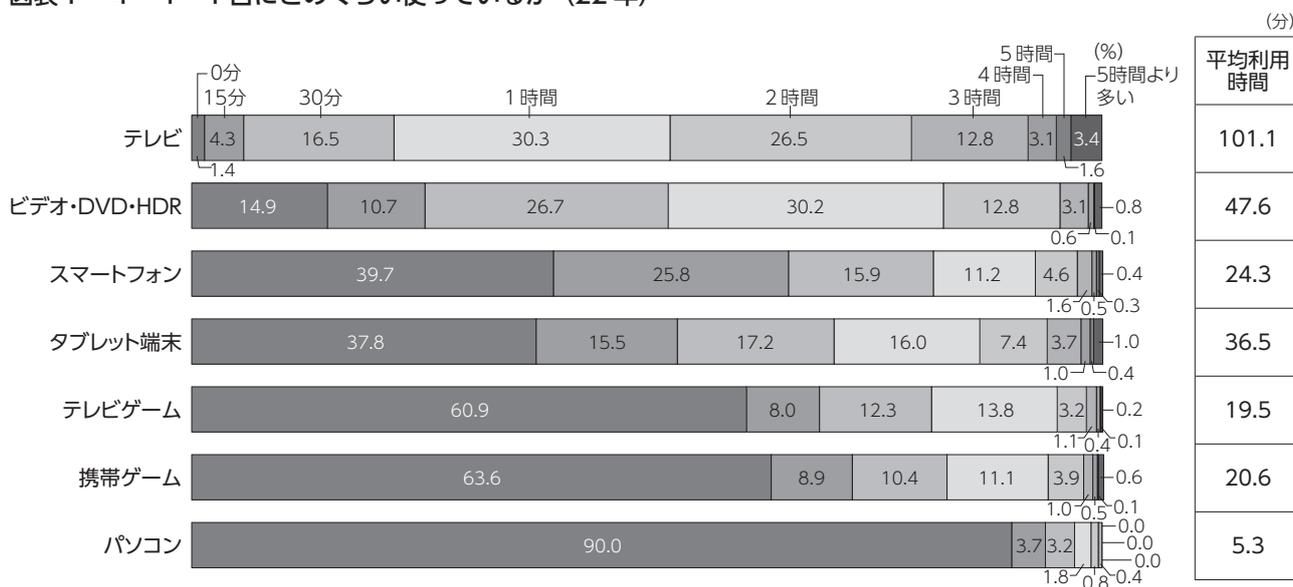
●家にあるメディアを1日で使う頻度

この節では、「テレビ」、「ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー」(以下、ビデオ・DVD・HDRと表示)などの電子メディアの使用についてみてみたい。メディアの1日あたりの視聴時間についてみたものが図表1-4-1である。テレビの1日の視聴時間は、「1時間」がもっとも多く30.3%である。「ビデオ・DVD・HDR」では、「1時間」がもっとも多く、30.2%である。「スマートフォン」、「タブレット端末」、「テレビゲーム」、「携帯ゲーム」、「パソコン」は「0分」がもっとも多く、「スマー

トフォン」と「タブレット端末」は約4割、他は6割以上を占めている。平均時間をみると、「テレビ」が101.1分、「ビデオ・DVD・HDR」が47.6分、「タブレット端末」が36.5分となっている。

視聴時間は、幼児の年齢や生活スタイルによる影響が大きいと考えられるため、子どもの年齢区分別・就園状況別にみてみよう。「ビデオ・DVD・HDR」では(図表1-4-2)、1日3時間以上の視聴はどのグループでも1割以下であるが、2時間以上の視聴では、低年齢未就園児20.4%、低年齢保育園児14.5%、高年齢幼稚園児18.2%、高年齢保育園児14.9%であり、低年齢未就

図表1-4-1 1日にどのくらい使っているか (22年)



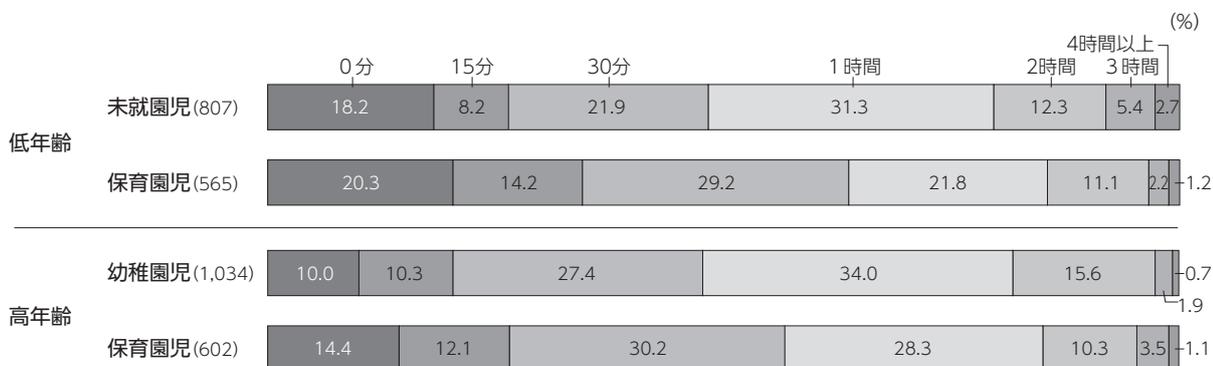
注1) 家にある人のみを分析。

注2) 平均利用時間は「0分(家にはないは含まない)」を0分、「5時間」を300分、「5時間より多い」を360分のように置き換えて算出した。

園児の視聴時間をもっとも長い。保育園児や幼稚園児は、園にいる時間帯以外の朝と降園後に視聴が限られるが、未就園児にはそのような制約がなく視聴時間帯が自由なため長くなっていると考えられる。図表1-4-3は、「タブレット端末」を年齢区分別・就園状況別にみたも

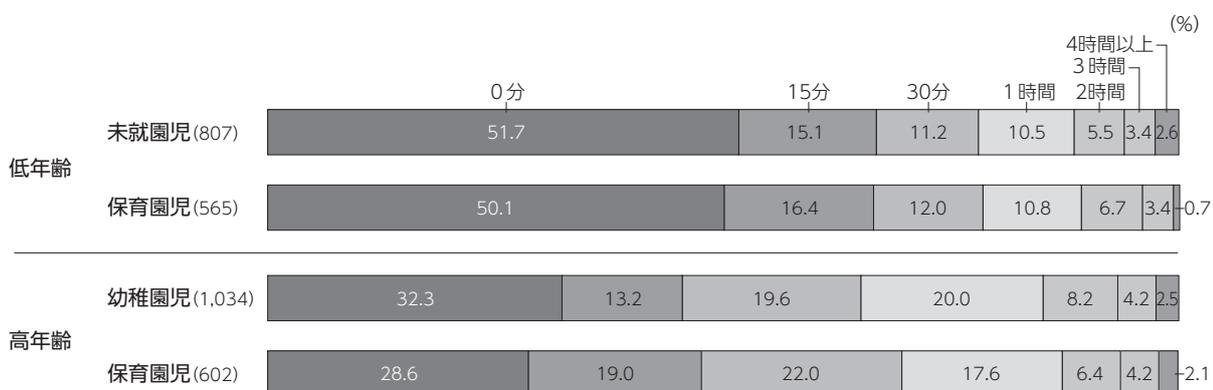
のである。低年齢児ではいずれも0分が約半数を占めているが、高年齢児では0分は約3割となっている。1日1時間以上の使用は、低年齢では未就園児22.0%、保育園児21.6%と2割程度であった。高年齢になると幼稚園児34.9%、保育園児30.3%と3割程度に増加している。

図表1-4-2 ビデオ・DVD・HDRを1日どのくらい使っているか (年齢区分別・就園状況別 22年)



注1) 家にある人のみを分析。
 注2) 「4時間以上」は「4時間」「5時間」「5時間より多い」の合計。
 注3) ()内は人数。

図表1-4-3 タブレット端末を1日どのくらい使っているか (年齢区分別・就園状況別 22年)



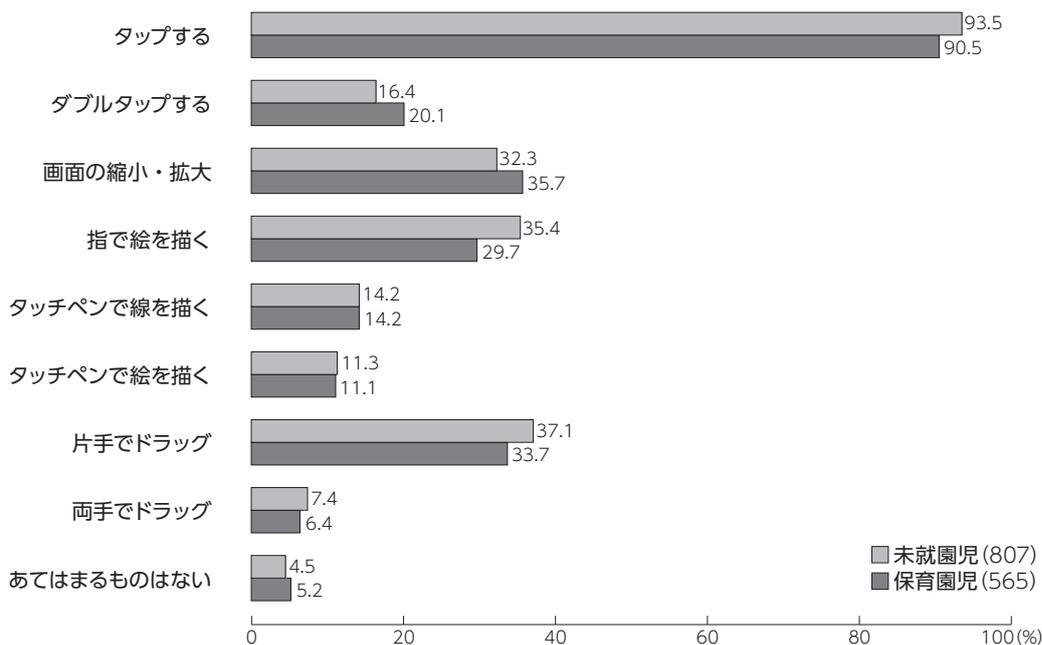
注1) 家にある人のみを分析。
 注2) 「4時間以上」は「4時間」「5時間」「5時間より多い」の合計。
 注3) ()内は人数。

●タブレット端末でできる操作の比率

次に、タブレット端末でできる操作の比率について年齢区分別・就園状況別にみてみよう（**図表1-4-4**、**図表1-4-5**）。「タップする」操作ができる比率は、年齢区分・就園状況にかかわらず90%以上となっている。次いで「画面の縮小・拡大」する操作の比率が高くなっており、低年齢未就園児32.3%、低年齢保育園児35.7%、高年齢幼稚園児69.8%、高年齢保育園児66.2%である。低年齢では約3割以上ができる操作は

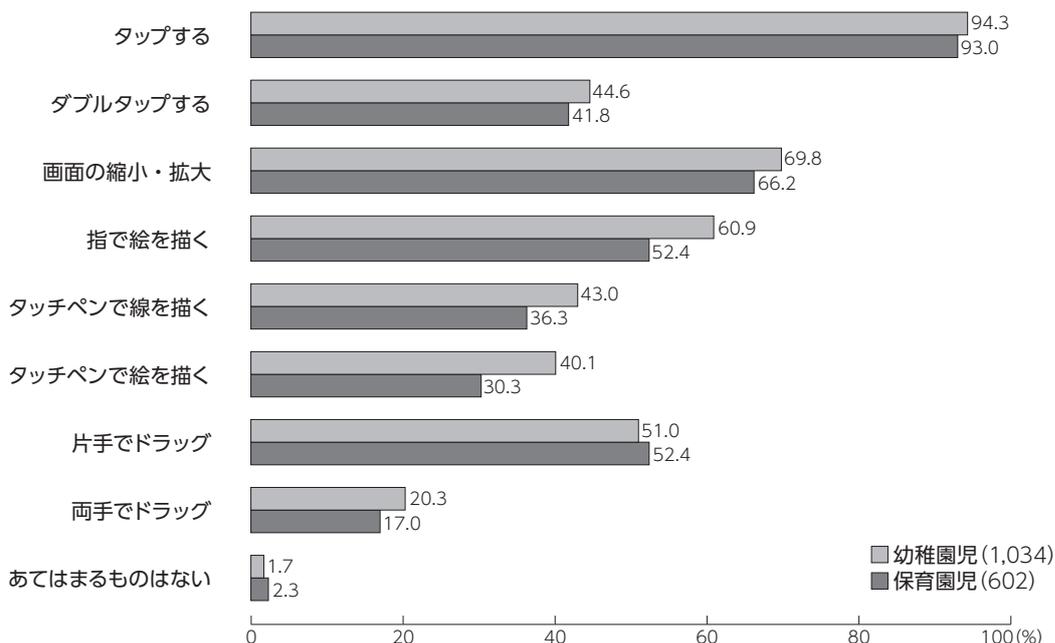
「タップする」「画面の縮小・拡大」「指で絵を描く」「片手でドラッグ」であるが、高年齢ではそれに加え「ダブルタップする」「タッチペンで線を描く」「タッチペンで絵を描く」ができるようになっている。また「タップする」「画面の縮小・拡大」「指で絵を描く」「片手でドラッグ」といったタブレット端末における基本的な操作を高年齢の5割以上ができており、低年齢から高年齢にかけてタブレット端末の操作のしかたを身につけていることがうかがえる。

図表1-4-4 タブレット端末での操作（就園状況別（低年齢児）22年）



注1) 家にある人のみを分析。
注2) ()内は人数。

図表1-4-5 タブレット端末での操作（就園状況別（高年齢児）22年）



注1) 家にある人のみを分析。
注2) ()内は人数。



第5節 幼児の遊び

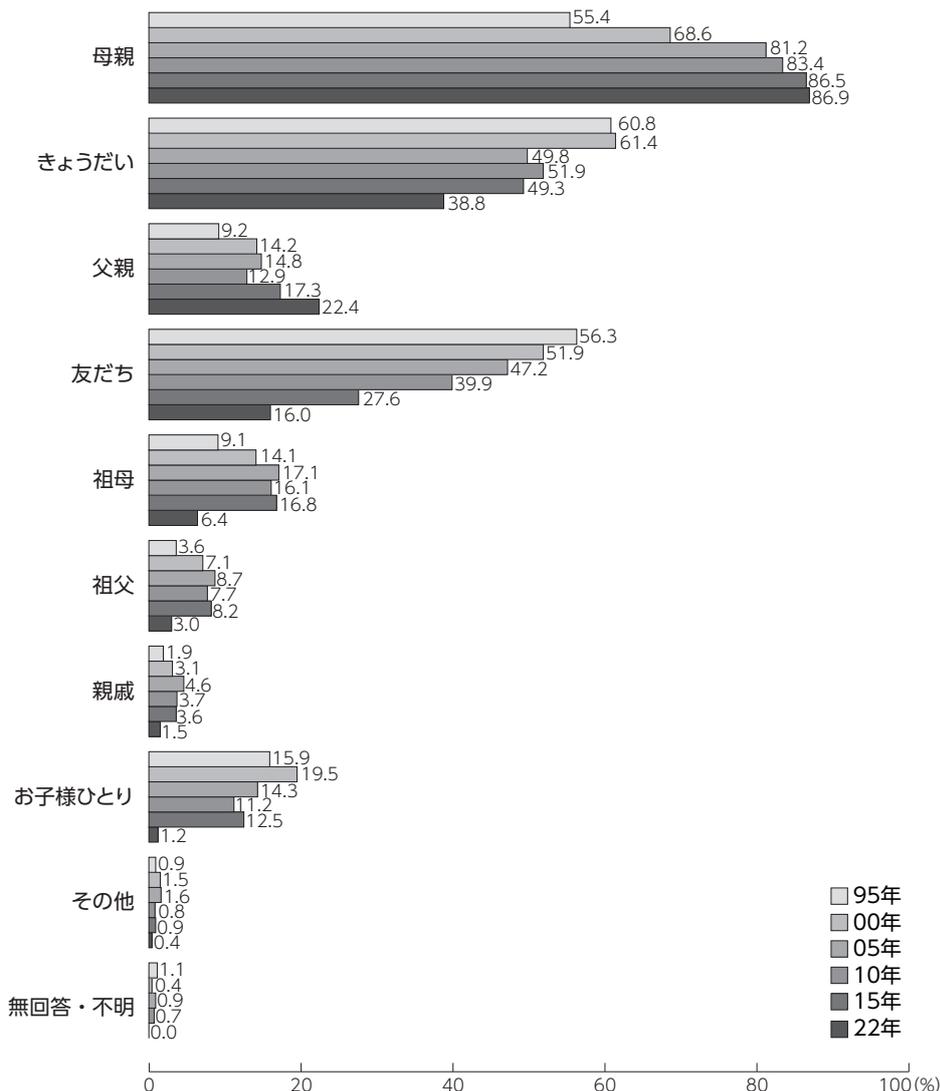
27年間を通して平日、幼稚園・保育園以外で「母親」と一緒に遊ぶ比率が増え、友だち、きょうだいと一緒に遊ぶ比率が減少している。また、幼児のよくする遊びでは、「公園の遊具(すべり台、ブランコなど)を使った遊び」、「つみ木、ブロック」「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」であり、27年間で大きな変化はみられない。

●平日「母親」と一緒に遊ぶ比率は高いまま

平日、幼稚園・保育園以外で遊ぶときにだれと一緒に遊ぶ場合が多いかたずねたところ22年でもっとも比率が高いのは「母親」86.9%であり、次いで「きょうだい」38.8%、「父親」22.4%であった(図表1-5-1)。27年間の変化をみると、「母親」が増加しており、95年

55.4%、00年68.6%、05年81.2%、10年83.4%、15年86.5%、22年86.9%と27年間で31.5ポイント増加している。一方、「友だち」と回答した比率は減少し続けており(95年56.3%、00年51.9%、05年47.2%、10年39.9%、15年27.6%、22年16.0%)、27年間で40.3ポイント減少した。この背景には、共働きの増加により保育園児が増えていることや幼稚園児、保育園児

図表1-5-1 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手(経年比較)



注1) 複数回答。

注2) 項目は22年調査結果の降順に図示。

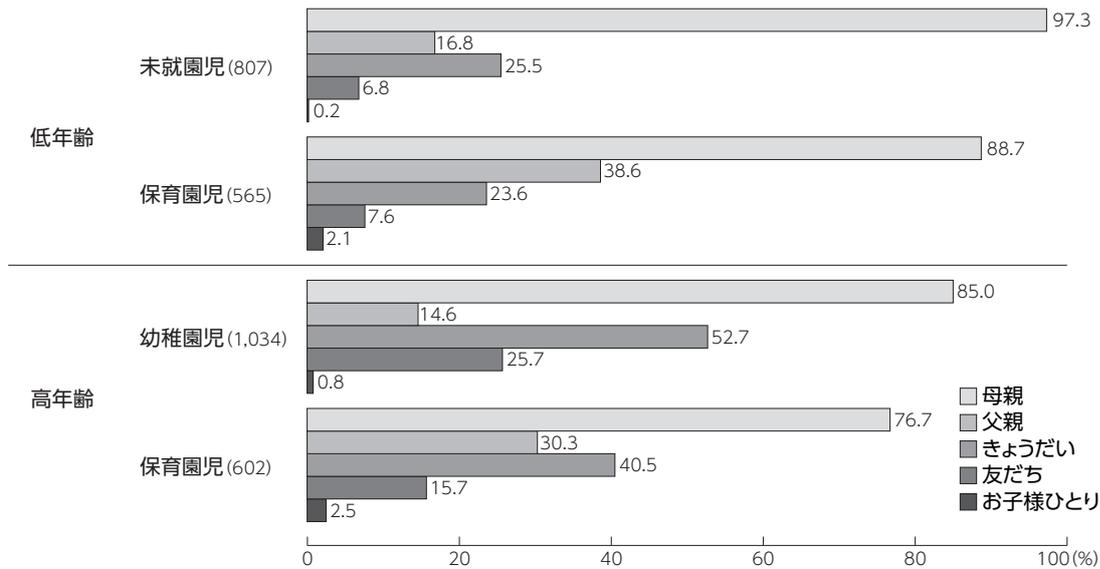
ともに登園のために家の外にいる時間が年々長くなっており、園以外の場所で友だちと遊ぶ時間が減っていることが考えられる。加えて、15年から22年にかけてさらに減った理由として、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、予防のため友だちと遊ぶ機会も減ったと推察できる。一方、15年から22年で増加したのは「父親」であり、5.1ポイント増加した。働き方改革やテレワークの導入の影響もあり、父親の帰宅時間が早まっている(ベ

ネッセ教育総合研究所(2022)「第6回幼児の生活アンケートダイジェスト版」p.7)ため、平日に遊ぶ時間が増えたと考えられる。

●平日、一緒に遊ぶ相手で就園状況により差があるのは、「父親」「きょうだい」「友だち」

平日、園以外で一緒に遊ぶ相手について、年齢区分別、

図表1-5-2 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手(年齢区分別・就園状況別 22年)



注1) 複数回答。
 注2) 「その他」を含む9項目の中から5項目を图示。
 注3) ()内は人数。

図表1-5-3 よくする遊び(経年比較)

	95年	00年	05年	10年	15年	22年
公園の遊具(すべり台、ブランコなど)を使った遊び	66.0	68.4	76.1	78.3	80.1	85.8
積み木、ブロック	54.9	56.0	62.8	68.0	68.5	66.4
ユーチューブを見る*						58.7
人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び	51.2	54.0	57.2	57.1	61.6	54.7
絵やマンガを描く	45.0	43.7	57.4	53.4	50.6	48.6
ボールを使った遊び(サッカーや野球など)	35.0	33.1	46.7	46.8	46.5	47.6
ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び	39.5	44.0	45.3	46.3	49.5	47.1
自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び	46.6	51.7	53.6	49.4	45.8	44.0
砂場などでのどろんこ遊び	49.7	52.1	57.5	53.6	48.1	43.7
動画・録画を見る(ユーチューブ以外)*						40.6
石ころや木の枝など自然のものを使った遊び	26.2	34.2	37.6	40.5	40.9	40.2
ジグソーパズル	21.7	18.1	28.7	32.8	33.1	40.1
マンガや本(絵本)を読む	29.8	28.3	44.7	44.3	43.8	39.0
おにごっこ、缶けりなどの遊び	14.0	13.8	21.0	23.4	27.9	31.2
テレビゲーム・携帯ゲーム*						27.3
カードゲームやトランプなどを使った遊び	19.5	17.9	26.0	25.7	27.5	25.1
知育・学習目的のアプリ*						23.8
なわとび、ゴムとび	14.2	12.7	19.1	21.2	20.7	21.4
娯楽を楽しむアプリ(遊びやゲーム)*						14.4
情操を育むアプリ(物語や音楽など)*						8.5
その他	7.2	9.2	13.4	10.3	9.8	1.2

注1) 複数回答。
 注2) 「*」は22年調査のみの項目。項目は22年調査結果の降順に图示。
 注3) 10年・15年調査はテレビゲームと携帯ゲームを分けてたずねたため、図表には掲載していない。

就園状況別にみたものが図表1-5-2である。いずれの年齢区分、就園状況においても、「母親」と回答した比率が高いが、その中でも低年齢の未就園児が97.3%と最も高い。次に注目したいのは「父親」である。低年齢、高年齢いずれも保育園児のほうが未就園児や幼稚園児よりも父親と一緒に遊ぶ比率が高い(低年齢保育園児38.6%、高年齢保育園児30.3%)。

一方、「きょうだい」と答えた比率をみると、低年齢では未就園児で25.5%、保育園児23.6%であるのに対し、高年齢では幼稚園児52.7%、保育園児40.5%と、低年齢児よりも高い。第2子と遊ぶ比率が増加するためと考えられる。

●「ユーチューブを見る」は約6割で上位に

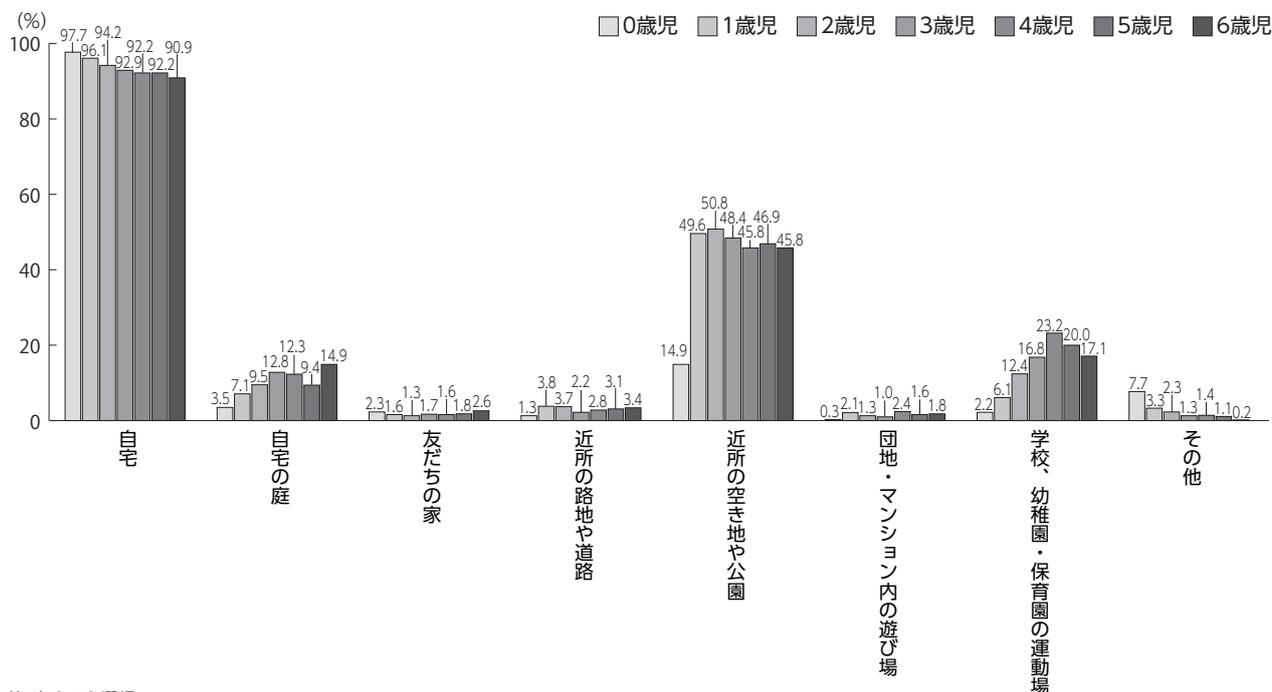
幼児がよくする遊びについて、27年間の変化をみてみよう(図表1-5-3)。幼児の全体をみると、5割を超えるものは、「公園の遊具(すべり台、ブランコなど)を使った遊び」がもっとも多く、「つみ木、ブロック」、「人

形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」、「絵やマンガを描く」であり、これらの遊びについては27年間を通して順位に大きな変化はみられない。しかし、22年から動画やゲームといった項目を新たに追加すると、「ユーチューブを見る」が58.7%と上位から3番目に位置づいた。その他、「動画・録画を見る(ユーチューブ以外)」は40.6%、「テレビゲーム・携帯ゲーム」は27.3%、「知育・学習目的のアプリ」は23.8%であった。

●遊ぶ場所でもっとも多いのは「自宅」

平日、園以外で遊ぶ場所についてたずねたものが図表1-5-4である(2つ選択)。もっとも多いのは「自宅」、次に「近所の空き地や公園」「学校、幼稚園・保育園の運動場」と続く。年齢別にみると、年齢があがるほど、ゆるやかではあるが、「自宅の庭」は3歳児以上はほぼ10%以上であり、「学校、幼稚園・保育園の運動場」は15%以上を占めている。

図表1-5-4 遊ぶ場所(年齢別 22年)



注1) 2つを選択。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



第6節 幼児の発達状況

12年前と比較して、低年齢児の生活習慣や排泄に関する発達は、達成率が上がっている。一方、2歳児では、おはしを使って食事をする事ができる比率は減少している。

● 12年前に比べて、低年齢児の達成率が全体的に上がってきている

幼児の発達状況に関する質問項目について、10年から22年までの12年間における比較結果をまとめる。図表1-6-1は、子どもの年齢ごとに生活習慣に関する発達について、10年調査と22年調査の結果を示したものである。図表からみてとれるように、低年齢児において、12年間で10ポイント以上、ないし5ポイント以上、達成率が上がっているものが多い。とくに、「決まった時間に起床・就寝する」「一人で洋服の着脱ができる」「一人で遊んだあとの片付けができる」といった生活習慣の項目で上がっている。また1歳児と2歳児の「自分でうんちができる」比率は大幅に増加している。

食事マナーの項目では、「コップを手でもって飲む」「ス

プーンを使って食べる」の達成率は上がっている。一方、「おはしを使って食事をする」「歯を磨いて、口をすすぐ」の達成率は下がっており、特に2歳児において顕著である。

● どの年齢も「決まった時間に起床・就寝する」達成率が上がっている

図表1-6-1でみられたように、達成率の増加が著しかった項目の1つに、「決まった時間に起床・就寝する」があげられる。

図表1-6-2は、10年、15年、22年までの12年間における子どもの各年齢での達成率の推移を表したものである。この図から、1歳児であっても、「決まった時間に起床・就寝する」が22年調査では7割を超えて

図表1-6-1 子どもの発達 (年齢別 経年比較)

(%)

		1歳児		2歳児		3歳児		4歳児		5歳児		6歳児	
		10年	22年										
		(538)	(611)	(479)	(620)	(537)	(620)	(561)	(620)	(494)	(620)	(503)	(620)
食事マナー	コップを手でもって飲む	63.6	< 75.6	96.0	95.1	95.8	99.3	96.1	99.2	95.9	99.0	94.4	98.5
	スプーンを使って食べる	60.7	< 69.0	95.5	96.2	95.6	98.9	96.1	99.0	95.5	99.5	94.2	< 99.4
	おはしを使って食事をする	3.3	3.5	37.5	> 26.8	64.7	> 57.2	82.0	> 73.4	90.9	> 85.2	93.8	91.6
	歯を磨いて、口をすすぐ	11.9	8.4	66.5	> 51.8	85.8	82.0	93.4	92.7	93.8	95.8	93.8	94.3
排泄	おしっこをする前に知らせる	4.1	5.8	22.6	19.2	82.2	> 76.2	95.2	96.6	94.7	97.2	94.0	96.8
	オムツをしないで寝る	0.9	1.5	4.8	3.9	43.9	> 34.4	70.8	68.9	81.9	80.7	88.5	89.4
	自分でうんちができる	6.1	< 24.6	24.0	< 35.4	73.6	71.3	91.8	91.9	93.3	94.3	94.2	95.1
	自分でパンツを脱いでおしっこをする	1.7	3.2	17.4	14.7	77.5	72.8	95.0	96.3	94.7	97.9	94.4	96.3
生活習慣	家族やまわりの人にあいさつをする	39.5	40.4	81.2	> 74.5	87.5	88.5	91.4	91.1	92.3	94.8	91.5	91.7
	決まった時間に起床・就寝する	50.5	< 71.9	63.7	< 75.3	66.9	< 79.2	79.5	< 85.5	82.9	87.0	81.9	84.9
	一人で洋服の着脱ができる	2.2	5.4	25.4	< 36.8	64.5	< 77.8	90.9	93.8	93.9	97.2	94.0	94.7
	一人で遊んだあとの片付けができる	14.3	< 27.8	44.4	< 61.4	65.5	< 72.1	79.3	83.5	84.7	89.2	85.7	86.9

注1) 「できる」の%。

注2) 満1歳以上の子どもをもつ母親の回答のみ。

注3) 10年、22年調査の結果を比較し、10ポイント以上の差があったものは濃い網掛け、5ポイント以上10ポイント未満の差があったものは薄い網掛けをした。

注4) ()内は人数。

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

いることがわかる。10年、15年と比べると15ポイント以上の差が生じている。年齢が上がるにつれ、過去調査との差は縮まっているものの、総じて22年調査の数値が高い。

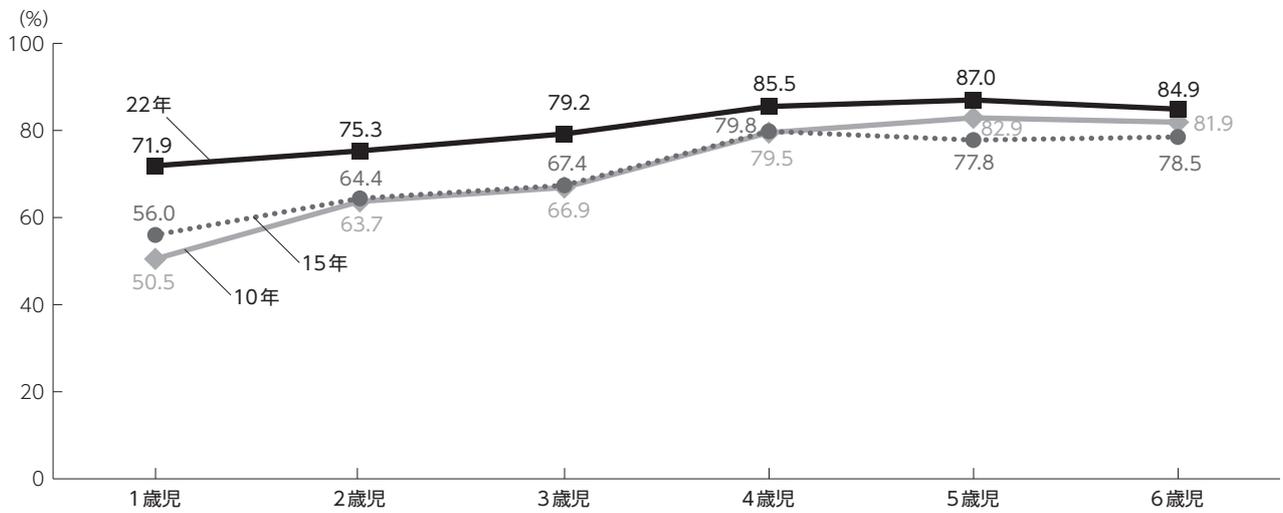
低年齢児で規則正しい生活習慣が整った要因の一つに、共働き世帯の増加により低年齢の保育園児が増えていことがあげられる。1節の生活リズムでもみてきたように、保育園児のほうが家を出る時刻は早く、帰宅する時刻は遅い。通園に合わせた生活リズムが固定化していることから、起床・就寝リズムが整っていると考えられるだろう。

●おはしを使って食事をすることができる比率は減少している

図表1-6-3は、「おはしを使って食事をする」ことができる比率の経年変化を示している。

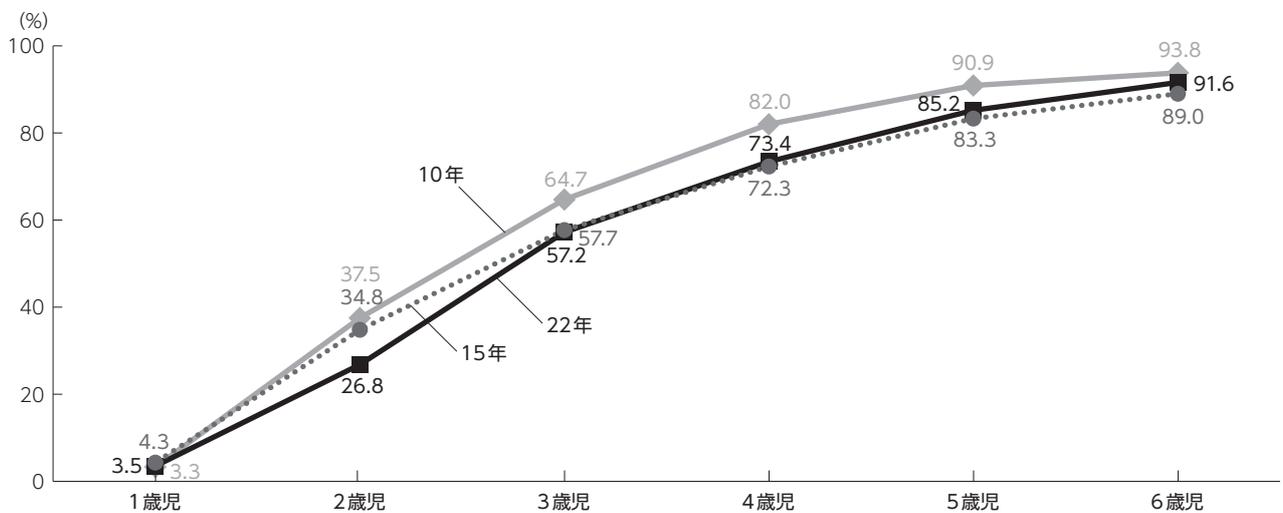
12年間の変化をみると2歳児から差が開きはじめてい。とくに2歳児は15年調査との差が他の年齢よりも大きく、8ポイントの差がみられた。3歳児以降は10年調査との差はあるものの、15年調査とはほぼ同じ傾向である。すなわち、過去に比べて低年齢児のおはしの利用が減ってきており、子どもがおはしを使って食事を

図表1-6-2 決まった時間に起床・就寝する (年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図表1-6-3 おはしを使って食事をする (年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

するといった習慣自体が変わってきているとも考えられる。ただし、6歳児ではおはしを使って食事をする比率は9割を超えていることから、低年齢児に限定した習慣の変化であるといえる。

●低年齢児の「自分でうんちができる」比率が増加

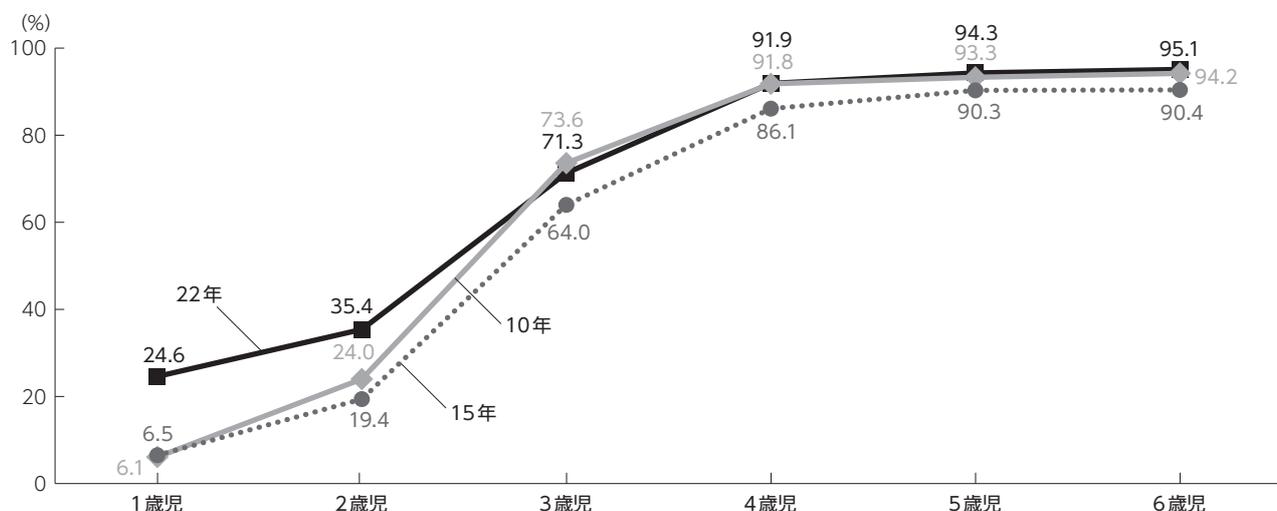
前回調査に比べて、達成率が大きく上がったのは、1歳児、2歳児の「自分でうんちができる」である(図表1-6-4)。

図表1-6-5では、サンプルサイズが十分に確保できている2歳児に限定して就園状況別に排泄の達成率を確認した。

過去3回とも、保育園児の方が「できる」比率が高い。22年調査に着目すると、未就園児も過去に比べて、「自分でうんちができる」比率は高くなっているものの、保育園児に比べると約10ポイント低い。

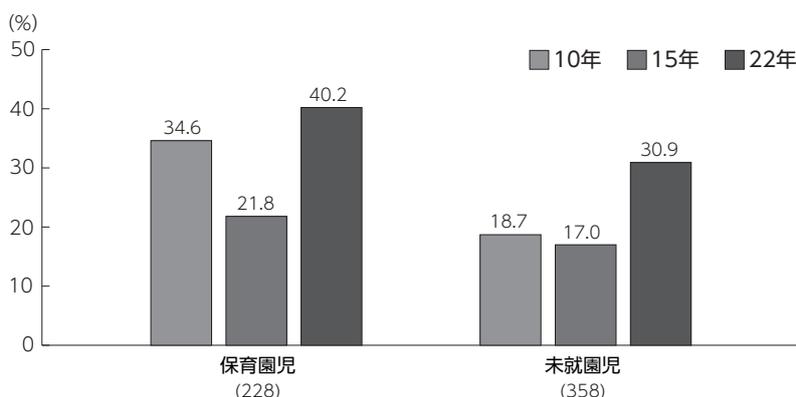
低年齢児から保育園に通う子どもが増えていることから、保育園でのトイレトレーニングが関連しているのではないかと考えられる。

図表1-6-4 自分でうんちができる(年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図表1-6-5 自分でうんちができる(就園状況別(2歳児) 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。